

うちの「宇宙の学校」

グレーの地域が「宇宙の学校」開催地域（都道府県）です。
今回は北海道函館市の宇宙の学校を紹介します！！



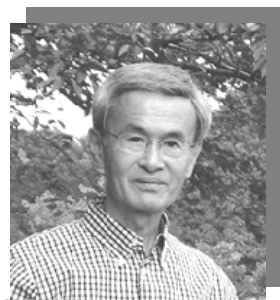
函館「宇宙の学校」

会員 村井 茂

「宇宙の学校」函館校開催母体は、NPO法人函館プラネタリウムの会です。当会は、プラネタリウム館や科学館などの施設を持たない地方都市、函館で、子供たちにプラネタリウムを見てもらいたいと思う人間が集まって来た会です。

すべて会員の手作り、会員の無償奉仕で、エアードームと固定式プラネタリウム館と、天文台により、子供たちに星空を見てもらっています。いままで4000名以上の方々に、見ていただき、月1回の月例上映会観望会を中心に開催しております。

6年前、KU・MA副会長遠藤先生が、手作りプラネタリウム館を見に、函館まで来られる事を会員の女性より聞きました。当館に来られた際には、近くのレストランで、遠藤先生が、我々2人に、宇宙の学校やいろいろなお話を熱く話されました。その話に刺激され、当会の若手の会員2人が中心になり、当会独自で、5組の家族に来ていただき、「科学を楽しむ会」を、4年前に開催いたしました。参加されたお母さんの一人が、他都市で宇宙の学校のような集まりに参加しようと思っていたが、函館でも開催されようかと思ったと話されました。また会員の2人が一生懸命取り組んでいるのを見て、3年前、宇宙の学校を私が校長をさせていただき、当会のプラネタリウム館で第1回目を開催しました。



「宇宙茫茫」顛末記

会員 樋口 周嘉

2008年7月2日付けの第1号から2013年10月2日付けの第26号までのメルマガジン「週刊KU・MA」に「宇宙茫茫」のタイトルで、宇宙開発関連のニュースのダイジェストを執筆して居りました樋口です。現役時代は某社で26年間に亘りロケットや宇宙ステーションの設計に携わって居りました。

「週刊KU・MA」へのこの記事の掲載につきましては、同メルマガの第1号の巻頭言で当時の川会長がメルマガを構成する3つの部分の第二番目として次の様に記して居られます。

『第二は、過去一週間に起きた宇宙関連のニュースです。私の大学時代の友人である樋口周嘉くんが、世界と日本の膨大な宇宙のニュースの中からダイジェストする大役を買って出てくださいました。友人とは有難いものです。数々のニュースを読み込んで短い文章でまとめる大変な労働量の産物なのです。よそではお目にかかれない素晴らしいリポートです。』

この期待に応えるべく5年3ヶ月に亘って毎週毎週ニュースを集め、要旨をレポートにまとめるという作業を続けて参りましたが、どの様に受け取って戴けておりましたでしょうか？私と致しましては、2013年の9月末に突然レポート作成の終了を宣言致しましたことは、些か手前勝手だったかなと反省をして居ります。（突然の申し出を受け入れてくださった川さんに感謝して居りますが・・・）

「週刊KU・MA」への原稿提供は上述の如く5年3ヶ月の間でしたが、実はこの仕事は、勤務先をリタイアした時に宇宙開発に係る後輩達のための情報収集という位置付けで元勤務先との契約に基づき始めた仕事で、当初は元勤務先のある部署にWord版を送り、そこから社内に配信という形をとっていました。その当時は「宇宙茫茫」ではなく「CHREPORT」と称していました（CHは私のイニシャルです）。その第1号は週刊KU・MAへの原稿提供開始を遡ること5年8ヶ月の2002年10月27日付けでした。

その後数年して元勤務先との契約は切れたのですが、社内レポートを見ていた方々から、個人的に送って欲しいという要望がありましたので、2007年4月からは「宇宙茫茫」としてpdfに変換したものをポランティアベースでお送りして来ました。

そして、この時から色々なところでお会いする方に、こんなことをやっているとお話すると、興味を示して戴き、送って欲しいということ順次送り先に追加させて戴いて来ておりました。そんな中にKU・MAの当時の会長の川さんが入って居られた関係で、週刊KU・MAへの原稿提供の話がまとまり、1年3ヶ月のポランティアに終止符を打ち、何某かの原稿料を戴いてKU・MAのメルマガに提供することになった次第です。



▲手作りプラネタリウム内で「宇宙の学校」開催

一年目は準備を兼ねておりまして、6家族に限定して行いましたが、昨年の2回目は函館市立中央小学校の体育館で行うこととし、公募したところ40家族130名の方が参加されるほどの規模になりました。

当会の会員は、ほとんどの方々が仕事を携っており、仕事の合間にプラネタリウムの会の活動を活動しております。

今年度は、担当していただける会員の数がやや減少したため、規模を小さく開催することにし、90名ほどの参加者で開催しております。

今後は、宇宙の学校に参加されている保護者の方々が、主催者側になつて運営されることが最も望ましい形だと考えております。当会のホームページにも書いておりますが、当会のモットーは「未来をつくる子供たちへ、科学の心を育（はぐく）もう」です。で、宇宙の学校と多くの部分で、共有、共通しております。

宇宙の学校

理事 並木 道義さん



今号から始まる新しいシリーズ。KU・MA会員「ちよっと」ご自身のことを語っていただき、会員の交流につなげていこうという企画です。

第1回目は、神奈川県相模原市の並木道義さん。KU・MA理事で、「宇宙の学校」の講師として全国を飛び回っておられます。会ったことのある方も多いかもしれません。

Q：ご出身は？

両親が山梨県に疎開中に生まれ、戦後東京に戻り世田谷で育ちました。

Q：道義少年が理系の道に進んだきっかけは？

音楽が好きだったので、楽団の生演奏を聴きに行くにはお金がかかる。そこで真空管を使って自分でアンプを作ろうとしたんです。自宅のオーディオで音楽を聴こうと思って。中学時代に仲間の家で、工作中に電線がショートして絨毯が燃えた、なんてこともありました。

Q：宇宙科学研究所に入ってから最初にどんな仕事をしましたか？

今の宇宙科学研究所が、当時は東大の「航空研究所」という名称だった頃に仕事を始めました。採用試験では、ドリルの歯に、ほどけないようにピアノ線を巻く実技試験が課されました。その器用さを買われ、風洞実験において風洞内にピアノ線を実験機を釣る仕事をしばらくこなしました。

Q：その後、気球観測がご専門になったんですね。

23年たった頃、気球グループが誕生し、以来40年余りにわたり気球観測に携わることになりました。水素ガスを充てんした気球に観測機器を載せ、宇宙線、X線、ガンマ線などの観測を行います。望遠鏡も搭載できます。衛星での観測は、やることを決めてから打上げまで10年かかりますが、気球での観測なら1年で実現するので便利なんです。

Q：水素ガスといえばロケットの燃料。危険では？

水素ガスを使ったのは当初だけで、その後はヘリウムガスを使っています。人が乗るような「熱気球」は布製で、バルーンで下から空気を温めながら飛ばせますが、「科学観測気球」は非常に薄いポリエチレン製で、ヘリウムガスを充填して飛ばしています。

Q：印象深い仕事は？

昭和45年に行った気球観測で、「はくちよう座にX線星（エックス線ぼし）H X線を出している星がある」を発見したことです。MIT（マサチューセッツ工科大学）が同じ時期に衛星を打ち上げ、その星の中心から強いX線が出ていることを確認し、「日本の観測は正しかった」と発表しました。今でいう「ブラックホール」の発見です。

Q：主にごで気球を飛ばせるんですか？

日本では、茨城県大洋村、福島県原の町、岩手県三陸町、北海道大樹町。海外ではオーストラリア、中国、ブラジルなどで、南極にも行き、いろいろ面白い経験をしました。

そして並木さんは、気球回収で培った経験により、オーストラリアのウーメラ砂漠で「はやぶさ」のカプセルが帰還した際に迅速な回収に成功されたのです。



▲グループ毎に家庭学習レポート発表

我々の活動により、函館地区の市民に喜んでいただけるよう、会員全員楽しく、無理せず和気あいあい、続けていこうと考えております。そして子供たちがこの函館地区をより、好きになってくれることになれば本望です。

今号から新しいコンテンツが登場！！

おすすめ書籍を紹介する「私の本棚」や事務局が突撃インタビューする「ちょっと聞かせて！！」などなど、色々なコンテンツでKU・MA活動やKU・MAのステキな人々を紹介し、情報をみなさんにお届けしていきます。次号もお楽しみに！！
ご意見やご感想もお待ちしています。

